

「特集」

福井 北前トラベル――

文＝ペリー・荻野

越前港町の記憶を歩く

福井県南条郡南越前町河野地区の台高に立つ、「北前船 右近家別荘 西洋館」から日本海を望む
写真＝須田卓馬

26 1章 北前船と夢の町

26 海運と商才と ―― 南越前町

31 風いだ天然の良港 ―― 敦賀市

36 2章 海と生きる町

36 雄島の海女 ―― 坂井市

44 福井 北前トラベル。〔案内図〕



特別企画 星野佑佳さんの写真でめぐる

京都、花もうで

おいしいもんには理由がある 文＝土井善晴

軽井沢とフルーツジャム

〔長野県北佐久郡軽井沢町〕

7 京都の路地 まわり道

文＝千宗室

納豆

ひとときエッセイ「そして旅へ」

文＝安田登

9 空海の見た蒼

古書もの語り 文＝内堀弘

11 『羅生門』

わたしの20代

五街道雲助（落語家）

50 柳家喬太郎の旅メシ道中記
八千代寿し鐵 駿河のにぎり
〔静岡市〕

〔静岡市〕

52 地元にエール これ、いいね！

土佐和紙「高知県吾川郡いの町」

58 旅するリラックマ

カワスイ 川崎水族館〔神奈川県川崎市〕

ホリホリの旅の絵日記 文・絵＝ほりのぶゆき

明治の遺構が張り巡らされた島

〔和歌山市〕

60 旬 News & Topics

62 美 Art & Entertainment

64 遊 Event & Festival

旅の小箱 from JRR東海、JRR西日本

66 「JRR東海×CAPCOM」
現地企画第2弾

67 「いいもの探訪」母の日ギフト

68 JRR東海グループ
共通ポイントがサービス拡大！69 「あなたと新幹線と60年。」
キャンペーンを開催70 「WEST EXPRESS 銀河」
3月～6月は山陰コースを運行71 273系特急やくも
新型車両が運行開始！

72 春爛漫の福岡県へ！

73 大阪城の櫓、三棟同時公開

74 ひととき倶楽部
読者からのお便り
今月のプレゼントなど

76 次号のお知らせ

78 ルートマップ
東海道・山陽新幹線時刻表

敦賀湊の北前船、三国湊の海女、雄島祭りなど、海と生きる人々を江戸時代と現代とをミックスして表現しました
イラスト＝ナカガワ暢

星野佑佳さんの写真でめぐる

京都、 花もうで

写真・解説 星野佑佳
Hoshino Yuka



楞嚴寺のみつばつつじ [綾部市]

「関西花の寺二十五カ所」の第2札所としても知られる楞嚴寺。「本堂向かいの小高い大師山一帯に約2,000株のみつばつつじが群生していて、満開時は花のアーチができます。つつじの中で一番最初に咲くことから一番躑躅(つつじ)とも呼ばれるこの花を見ると、春もたけなわと感じますね。この時は門前の池に蒸気霧が発生していて幻想的な一枚が撮れました」

開4月上旬～中旬 園楞嚴寺 ☎0773-47-0043

記憶に残る桜を

桜のシーズンは東の間と思われがちですが、京都では2月末頃に咲く東寺の河津桜から始まり、3月上旬頃に咲く車折神社の寒緋桜、そして5月の大型連休に見頃を迎える千本ゑんま堂(引接寺)の普賢象桜まで、2カ月にわたってさまざまな品種が咲くので、春の間、どこかしらで桜を見ることができるようなんです。私もこの時季は京都のあちこちで桜を撮影しますが、思うように撮れない風景もあります。子供の頃、父の運転する車の中から見た鴨川や高野川沿いの桜吹雪の感動をカメラに収めたいと思い、松ヶ崎疎水や川端通の桜並木など、いろいろな場所でチャレンジするのですが、肉眼では美しくても写真に撮るとあまり絵にならない。思い出を超えるのはなかなか難しいことですが、誰かの記憶に残る写真を撮りに、この春も京都の花もうでに出かけたいと思います。(談)

ほしのゆか／写真家・フォトエッセイスト。京都市生まれ。同志社大学法学部卒業。2000(平成12)年から国内外を放浪しながら撮影を始め、05年より地元京都の風景や風物詩の撮影を手掛ける。著書に『京の祭と行事365日』(淡交社)やフォトエッセイ集『撮り旅』(風景写真出版)がある。

特集

福井

文＝ペリー萩野
Perry Ogino

写真＝須田卓馬
Suda Takuma

3月16日、北陸新幹線の金沢〜敦賀間の
つるが
開業で盛り上がる福井県。

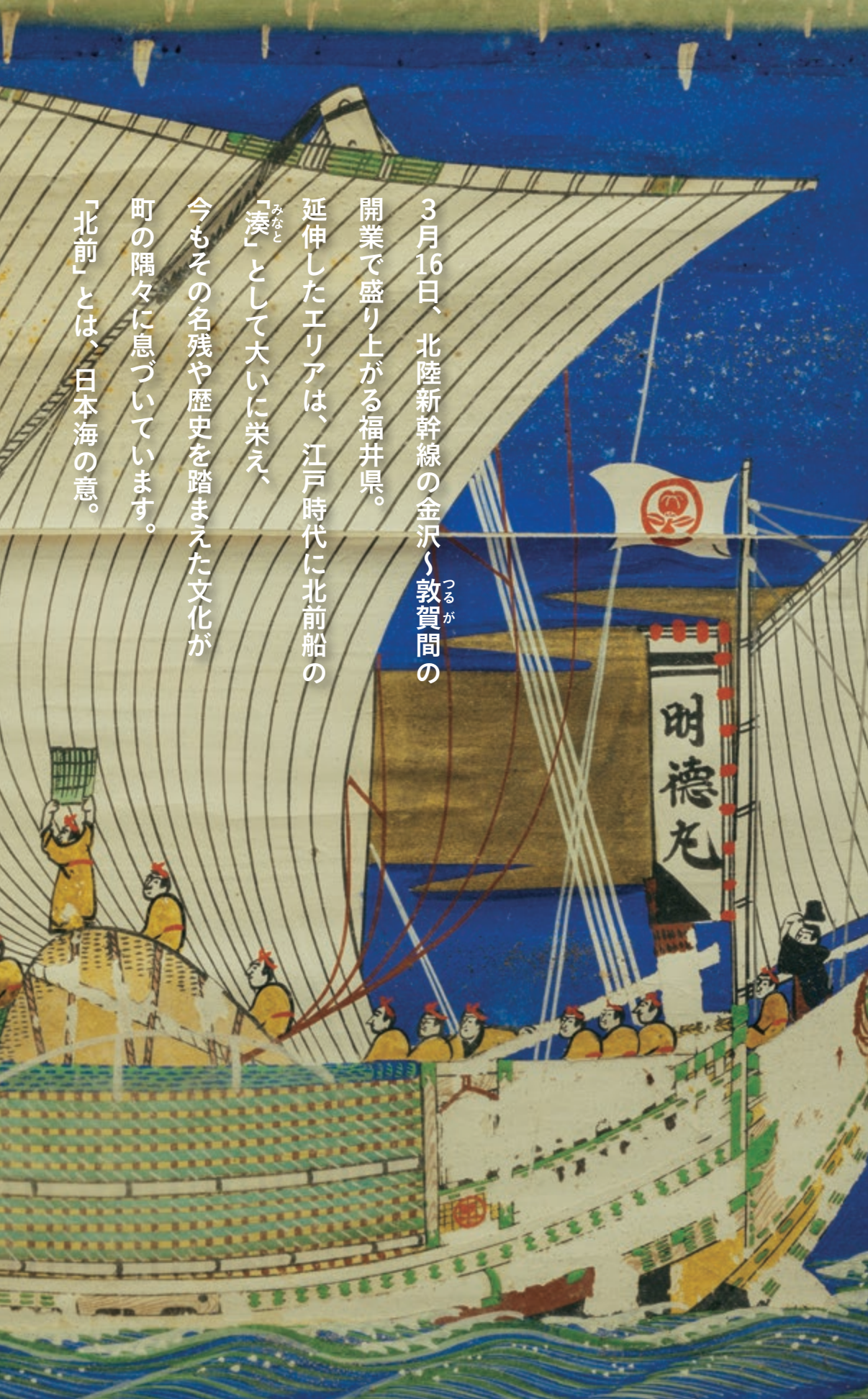
延伸したエリアは、江戸時代に北前船の

みなと
「湊」として大いに栄え、

今もその名残や歴史を踏まえた文化が

町の隅々に息づいています。

「北前」とは、日本海の意。



北前トラベル。

越前港町の記憶を歩く

日本海を縦横無尽に駆け抜けた
北前船の要港・敦賀や三国をめぐり、
船主集落や港町の面影、男たちが船に
乗っている間の生活を支えた海女の伝統を
受け継ぐ女性たちを訪ねます。
潮風も穏やかな春、海とともに生きてきた、
福井の智慧に触れてみましょう。

南越前町の「北前船主の館 右近家」に残る船絵馬。無事の航海を終えたあと、北前船の船頭は感謝を込めて船絵馬を神社に納めた



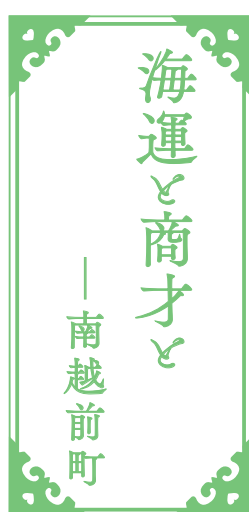
◆1章

北前船と夢の町

近世から近代にかけて、日本海を航行した北前船の主な寄港地が北陸にありました。特に敦賀は、北海道の海産物や東北の米を関西圏へ運ぶための重要な湊。

五大船主のひとりと謳われた右近家の足跡や、1600年前から湊として栄えた敦賀港に残る華やかな文化に、海運で潤った繁栄ぶりが見てとれます。

地域発展にも尽くした9代目・右近権左衛門〔1816-1888〕写真提供＝南越前町



風を受けていっぱいにくらんだ白い帆の力で、がっしりとした木組みの船体が海を滑るように進んでいく。「どんぐり船」とも呼ばれるでっぴりした腹の中には、各地の自慢の産物がぎっしりと詰め込まれている。

江戸時代の半ばから、1897（明治30）年ごろまで、こうした「北前船」が日本海を数多く行き来した。当時の船絵馬や錦絵には、入港してくる大小の白帆や、帆を下ろして停泊する船がいくつも描かれ、湊のにぎやかなようすが伝わってくる。水軍力抑止のため、大型船建造を禁止した幕府の統制下でも、目いっぱい規模を確保



〔右〕南越前町河野地区にある「河野北前船主通り」は、江戸時代に隆盛を誇った北前船主の邸宅や蔵が並ぶエリア 〔左〕邸宅のひとつで、当時の船具や右近家の家財を展示する「北前船主の館 右近家」の展望台へ上れば、外海へとつながる湊のようすが一望できる

して荷を積み、独自の商法で巨利を得た北前船を、作家・司馬遼太郎は著作『菜の花の沖』の中で、「船の王」と書いた。

大海にロマンを積んで

「北前」の名の由来には、「北廻り船」がなまった、日本海を「北前の海」と呼んだ、などいくつかの説がある。

船の主な形式は「弁財船」と呼ばれる堅牢な和船だ。江戸期は幕府の定めで帆は1本だったが、鋭角の船首で波を切り、逆風でも進める高度な帆走性を備えていた。大きさは500石程度のものから、「千石船」の名の通り、米を1000石（約150トン）積める大型船も少なくなく、最大のものは2400石積だったという。

進む航路は、蝦夷地（現在の北海道）と大坂を結ぶ「西廻り航路」。人口が急増した江戸に直轄地の出羽（現在の山形県、秋田県）の米を効率よく運ぶため、幕府が商人の河村瑞賢〔1618-1699〕に命



※1 江戸後期、北前船の廻船業者として、ロシアと通商を行うほどの大商人に成長した高田屋嘉兵衛（かへえ）の生涯を描く歴史小説 ※2 伊勢出身の材木商で、幕命を受けて東北の官米を江戸に回送するための東廻り航路（阿武隈川の河口から江戸へ）、西廻り航路（酒田から下関を通り、大坂・江戸へ）を整備



〔右〕敦賀湾は山に囲まれた穏やかな入り江 〔左〕湾口には古戦場としても知られる金ヶ崎があり、鎮座する金崎宮〈かねがさきぐう〉では、4月、男女が花枝を交換する花換〈はながえ〉まつりが行われる 写真提供＝敦賀市

北前船の寄港地の中でも重要な拠点のひとつ、敦賀を訪ねる。日本列島のくびれた位置にある敦賀の湊は、日本海側で最も太



そうです。若いときから、家の廻船に乗り込んで、各地の情報や経営を学んだ9代目は、自ら北前船の船頭も務め、多大な利益を手に入れました」（北前船主の館 右近家）でボランティアガイドも務める、河野北前船主通り案内の会会長の千馬仁視さん（せんまひとみ）

右近家の店印は、2本の斜め線で「一膳箸」を表す。「物を運ぶ」「橋渡し」の意があるという。資料館には髻を結び、帯刀した9代目の写真パネルがある（26頁）。

小柄で少年のような面差しがこの人が、千石船を操り、ダイナミックな商いに挑んだのだ。なお、この人に育てられ、明治の世を生きた10代目も時代をよく読んだ。電信など情報網の進歩で買積のうまみを失うと、船を西洋帆船、蒸気船へと切り替え、運送業へと転換。同業者の保護育成のため、日本海上保険会社（現在の損害保険ジャパンの礎のひとつ）設立にも尽力している。



〔右〕敦賀のシンボルのひとつ、越前国の一之宮である氣比神宮。9月には「氣比の長祭」として約2週間の例祭が行われ、「山車巡行」では、華やかな山車6基が巡行する。敦賀の神社らしく、門前の広い参道沿いには大小さまざまな昆布店が軒を連ねる 〔中・左〕門前の老舗昆布店・増井弘海堂は氣比神宮御用達。ショーケースにはおぼろや出汁用などさまざまな昆布が並び



6月ごろ、サザエ漁を行う雄島の海女。5メートルほど潜り、桶を浮かべてサザエを獲っていく 写真＝梅津忠夫（下、39頁も）



4月に行われる雄島祭りの時期になると、雄島に架かる橋に掲げられた大漁旗や鯉のぼりが潮風を孕んではためく

魚志楼 [右] 凛とした着物姿でカウンターに立つのは女将の松崎真理子さん。店主・松崎陽平さんの母でもある [中] 同店の開業は明治初期。主屋は国の登録有形文化財だ [左] 人気メニューは大きな甘海老を使った甘海老天丼。甘海老の天ぶらを卵でとじたまろやかな味わいの天丼だ。ほかに、ねっとり甘い「がさえび」の丼や、夜の懷石コースなど、三国の海の幸を堪能できるメニューが揃う



どで用いられた器などが展示されている。「当時は商談のお客様がほとんどでした。残された写真には、芸者さんも多いですね。旬のお料理を大皿にお出しして、とりわけながらお酒とともに楽しんでいただくのが定番だったと思います」（女将の松崎真理子さん）

北前船の船乗りたちが各地で覚えた民謡を歌うことで、九州の「ハイヤ節」は新潟の「佐渡おけさ」や青森の「津軽あいや節」に、島根の「出雲節」は「秋田船方節」へと変わったという。三国でもにぎやかに歌われたに違いない。

玄関のたたきには、福井足羽山産の笏谷石が使われている。緑がかった越前ブルーの美しい凝灰岩は、加工がしやすいため重宝され、北前船のバラスト（底荷）の役割も担いながら蝦夷地に運ばれて、現地の建築物に用いられた。

職人たちの知恵と技も遺されている。

三国は、簞笥の産地だ。北前船の時代には、船に積む「船簞笥」が作られた。中でも往来手形や証文などを入れるため、櫓など頑丈な板に漆を塗り重ね、分厚い金具を施した「帳箱」は、なんと水に浮くという中に気密性の高い桐箱が隙間なく納められているため、万一、海に放り出されても、濡れて膨張した桐箱が浮き輪代わりになる仕組みなのだ。

「簞笥も金具も華やかな佐渡のものとは少

立ち寄りグルメ in 三国

三国の酒まんじゅう

もち米と米麴を使った甘酒を熟成させて作る酒まんじゅうが、船頭から伝わったといわれるこの町の名物。焼き印に屋号の文字が入る独特の意匠で、「長」「涛」「扇」など、店ごとにその文字は異なる。コンプリートしてみてもいいか？ 写真は「酒万寿処にしさか」のもの



し違って、三国のものは金具も少なめで優美ですね。航海のリーダーである船頭は、別に紋付羽織袴を入れた自分用の『平櫃』という簞笥を持ち、大きな商いを進めた。寄港地では身なりを整えて下船したんですよ」（時代簞笥資料蔵）を併設する近藤古美術の近藤克子さん）

北前船の船乗りたちは、故郷で冬を過ごしたあと、歩いて出航地の大坂に向かった。湊に囲われていた船に荷を積み、3月から11月まで航海を続けるのだ。

白帆を掲げ、陽光できらきらと輝く海に出ていく船を想う。春は出発の季節だ。

ベリーおぎの／愛知県生まれ。コラムニスト、時代劇研究家、テレビやラジオのパーソナリティとして活躍。著書にテレビ黎明期取材した『テレビの荒野を歩いた人たち』（新潮社）など。

おいしいもんには
わけ
理由がある

第64回

文〓土井善晴
Doi Yoshinori
写真〓岡本寿
Okamoto Hisashi

軽井沢のジャム専門店、沢屋では
ジャム作りを体験できる。作りた
てのフレッシュなジャムは色鮮や
かで、部屋中が甘い香り！

戦前から洋食文化が根付いた軽井沢のジャム専門店を訪ねました

軽井沢とフルーツジャム

《長野県北佐久郡
軽井沢町》

軽井沢からよく見える浅間山は、長野県と群馬県にまたがる活火山だ。戦前、外国人宣教師たちが軽井沢に別荘を建て始めたころ、浅間山に自生するブルーベリーを摘んでジャムを作っていたそう。土井さん、両手を大きく広げて壮大な山容を表現！

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別招聘教授。NHK『きょうの料理』に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』(ウェッジ)など著書多数。



すでに家計支出では、パンが米を上回っているそうです。ご飯が好きな我が家でも、ゆっくり食事ができる休日の朝はパンの日が多くなりました。朝ごはんの調理はシンブルで、卵とベーコンを焼いて、フライパンで野菜を蒸して、パンを温め、チーズやバター、それにフランス土産のジャムを数種並べ、大きな白いプレートを銘々置いてテーブルを整えます。好き好きに味を調べて、パンの朝食を楽しみます。

十字軍のオリエント遠征^{*1}を通じて砂糖がヨーロッパに入り、「ジャム」という言葉が生まれたのは中世でした。砂糖の生産がアメリカ大陸でも盛んになる16〜17世紀には、植民地からも砂糖が入るようになります。果物と砂糖を「50対50」で煮て保存する大原則が広まると、ヨーロッパの家庭でもジャムを作るようになり、抗酸化作用のある果物のポリフェノールが濃縮された身体に良いものとして、親しまれるようになりました。

今回訪ねる軽井沢が人気の別荘地とは知っていましたが、関西人とは案外縁がなく、その歴史を考えたこともありませんでした。



ジャムこばやしの、ブラムリー(青りんごの一種)と山ぶどうのジャム

朝9時、軽井沢駅到着後に向かったのが、宣教師の住まいを建て直した軽井沢シヨール記念礼拝堂。今も祈りの場として、すべての人に開放されています。教会のある旧軽井沢あたりは、江戸時代、中山道の宿場として賑わいますが、明治時代になると参勤交代がなくなって、静かになりました。

避暑地としての軽井沢が始まるのは、1886(明治19)年、カナダ生まれの宣教師、アレキサンダー・クロフト・シヨール氏と友人たちが避暑に訪れるようになってからです。浅間山の麓、夏には野花がいっぱい咲く自然と清涼な空気を、彼らの故郷の景色と重ねてとても気に入ったようです。

キリスト教の布教が許されるようになり、別荘を建てたのがその2年後。それからは外国人が増えてゆき、日曜日にはシヨールさんの教会に通ったそうです。彼らは美しい自然を愛し、お祈りし、穏やかに生活することがきれいな心を作ると知っていたのだと、『シヨールさん物語』(宮本かほる著)に

*1 11〜13世紀にかけて、西ヨーロッパのキリスト教勢力が西アジアに、イスラム勢力からのエルサレム奪還と布教の目的で「十字軍」を大規模派遣。その間、国際的な商取引が刺激され、砂糖もヨーロッパに広まることとなった